第十六課　良心

我等は何かよい事をすると、人にほめられないでも自分で心嬉しく感じ、また何か惡い事をすると、人に知れないでも自分で氣がとがめます。これは誰にも良心があるからです。この良心は、幼少の時にはまだ餘り發達してゐないのですが、親や先生の教を受けて次第に發達し、善い事と惡い事との見わけがはつきりつくやうになります。さうなると、人の指圖を受けないでも、善い

事はせずには居られないやうに感じ、悪い事はすることが出來ないやうに感じます。

我等は自分の良心の指圖に從はねばなりません。人が見てゐないからとて、自分の良心の許さないことをしては、自分で自分の心を醜くすることになります。我等はよく自分をつゝしんで、天地に恥ぢないりつぱな人にならねばなりません。明治天皇の御製に

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは
人の心のまことなりけり

とあります。

今から百三四十年前、仙臺に林子平といふ人がありま

尋修六

した。非常に愛國心の深い人で、一般にはまだ外國の事情がわからなかつた當時、早くも世界の大勢を知つて國防の大切なことを說きました。幕府は子平を、根もない事を說いて世人を迷はす者として、その兄の家に幽閉しました。子平はそれから後、毎日一室の中に居つて一歩も家から出ないので、友達は子平が病氣になりはしないかと心配して、「誰も見てゐるわけではなし、氣晴しに少しぐらゐ出て歩いたらどうか。」と言つてすゝめました。子平は、そんなかげひなたのある行をすることは、どうしても自分の良心が許さないので、「御親切は有難いが、それでは上を欺くことになる。たとひ見てゐる

人がなくても、そんなことは出來ない。」と答へました。

尋修六